

なんでもありな人間も  
問題児と共に異世界に  
くるそうですよ？

ゆっくりキリト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

新しく出しました。

突然ですいません。

一生懸命がんばります。

# 目次

プロローグだそうですよ？	1	第九話だそうですよ？	66
主人公の設定的な何か	7	第十話だそうですよ？	72
YES！ウサギが呼びました！		第十一話だそうですよ？	81
第一話だそうですよ？	15	第十二話だそうですよ？	91
第二話だそうですよ？	21	第十三話だそうですよ？	100
第三話だそうですよ？	25		
第四話だそうですよ？	32		
第五話だそうですよ？	38		
第六話だそうですよ？	48		
第七話だそうですよ？	53		
第八話だそうですよ？	59		



プロローグだそうですね？

「……ん、……此処は……」

青年がいたのは白い空間だった。何処までも白かった。上も、下も、右も、左も、最早自分が立っているのか寝転んでいるのかすらも判らないほど白かった。

当然、青年は困惑する。

—— 何故、自分は此処にいるのか。

—— 何故、

—— 何故、

—— 何故、何故、何故、何故、何故、何故、

—— 此処に来る前までの事を自分は覚えていないのか。

ふと、何かの気配がした。青年は気配がした方へ振り向いた。

其処には、机と椅子があった。何故、其処に椅子があるのか青年にはわからなかった。

だが、自分はその椅子に座らなければならないと思った。其処に座るのが当たり前と思っていた。

青年が椅子に座ると、一枚の紙が現れた。その紙には

『転生の間にようこそ』

と書かれていた。

その文字を読んだ瞬間、青年は直感的に理解した。

——ああ、自分は死んだんだ。

青年は納得した。自分の記憶は無いのにその他の知識はあるという事に。

青年が思案に暮れていると、紙に書いてある文字が変化していった。

『欲しい〔力〕を記入してください』

——力？どうということだ？

青年は考えた。考えてこの紙に書かれている文章の意図を察した。そして思った。

——どうせなら無双してやろう。

しかし、唐突に「力」といわれてもすぐには思い付かない。しばらく青年は考えた。そして、記入欄に「力」を十三個書いた。

《永遠》

《始原》

《創世》

《五帝》

《無限の劍製》

《無尽蔵の魔力精製炉（名前は「エターナルサイクラ」で）》

《全身の神経を隅々まで魔力回路に》

《全て遠き理想郷》

《サーヴァントにアルトリア（セイバー）を》

《成長の限界を無くす》

《基本スペックがEXクラス》

《無限倉庫》

《モンスターハンターの全てのモンスター（モンスターは、ポケモンのモンスターボー

ルに入る仕様)》

書き終わると文字が変わり、次の文章が現れた。

『受理しました。それでは、よい人生を』

読み終わると同時に体が光に包まれた。そして、青年は真っ白な空間から姿を消した。

次に青年が目を覚ました時には、青年はベッドに寝かされていた。何の変哲も無い、殺風景な部屋だった。どうやら、此処はアパートらしい。

』



「……知らない天井だ……」

某決戦兵器のパイロットのような事を言いながら、青年は起き出した。

周りを見渡すと、勉強机のような物の上に一つの手紙と通帳が置いてあった。

青年は手紙を空け、中身を読んでいく。

『転生成功おめでとうございます。これから貴方は「四季咲 死鬼」として、第二の人生を生きてもらいます。手元の通帳には、五百万円を振り込んでおきました。どうか、貴方の人生に幸あらん事を。ちなみに、この手紙を読んで数秒後に魔方陣が展開され、セイバー『アルトリア・ペンドラゴン』が召喚されます』

読み終わると、手紙に書いてあるように目の前に魔方陣が展開され、一瞬の閃光の後、目を開けると、

「問おう。貴方が私のマスターか」

凜とした輝きを放つ騎士王がいた。

こうして、一人の規格外が誕生し、運命の歯車が廻り出したのである。

# 主人公の設定的な何か

四季咲 死鬼

身長：186・4cm

体重：65・7kg

見た目

『カゲロウデイズ』の如月伸太郎っぽい。服はまんま伸太郎。

基礎ステータス

筋力：EX                      敏捷：EX

耐久：EX                      魔力：EX

異能

・《クロース・ド・クロック  
永 遠》

時を止める異能。時を止めていられる時間は無制限で、止められた世界の中では星霊だろうが神だろうが、動けるのは自分だけである。自分が触れている物、もしくは人物は時が止まっていても活動することは出来る。

あくまで時を止めるだけなので、巻き戻しや早送り、タイムスリップまでは出来ない。

ルード・オブ・オリジン  
・《始原》

万物を直す異能。あらゆる物を指定した状態まで直して戻す。それが生物であつても例外ではない。だが、ただ直すだけではない。この能力の真髄は万物を直すという物にある。万物、それはつまり事象でさえも直すことが可能という事。その力を応用すれば、擬似的な蘇生も可能である。ただ直すだけなので、時間までは戻らない。

ぶつちやけ、クレイジー・ダイヤモンドの上位互換である。

ワールド・クリエイト  
・《創世》

万物を創造する異能。イメージするだけで、武器も日用品もロボットも、さらにはダンジョンまで創ることが出来る。任意で削除することも可能。

オーバー・エレメント  
・《五帝》

炎・水・土・風・光の五つの属性を自在に操る異能。組み合わせも豊富で、「炎＋土＝マグマ」や、「土＋水＝泥沼」なんて事も出来る。

エターナル・サイクラ  
・《無限魔力精製炉》

異能ではないが、無尽蔵に魔力を生み出す精製器官を体内に持つ。目には見えず触る事も出来ないの、破壊する事も出来ない。これのお陰で、サーヴァントであるアルトリアは宝具ブッパし放題である。恐ろしや。

## 宝具

Unlimited Blade Works  
 ・《無限の剣製》

ランク：E〜A++ レンジ：??? 最大補足：???

元々は英霊エミヤ（アーチャー）と衛宮士郎が展開できる固有結界。

厳密には宝具ではないが、彼の象徴という事で事実上アーチャーのものは彼の宝具とされている。

剣を構成するあらゆる要素を内包しており、一度オリジナルを視認して登録しておけば容易に複製することができる。ただし複製物は能力のランクが一つ落ちる。

ちなみに白兵戦で使う武器であれば結界内にストックされ、防具類などもストックされる。

また、投影時にオリジナルに宿る戦闘の経験や元の担い手の技量などを読み取るため、術者は一時的に元の担い手に近い戦闘能力を得ることができる。

結界形成時に既に用意されている武器は魔力は消費しないが、結界の形成から維持まで魔力を消費し続けるのに加え、破壊された物を再度複製する、もしくは結界を展開した後に新たに視認した武器を新調する場合は著しく魔力を消耗する。

だが死鬼の場合無限魔力精製炉により、無尽蔵に魔力が供給されているので魔力消費等はあまり意味は無い。

剣だけでなく、防具や盾も複製可能だが、通常の2、3倍の魔力を消費する。

この結界の中にはこれまでに視認した剣（エミヤが視認した剣も可）が既存しており、発動すれば全ての投影のプロセスを省略して使用可能である。

ちなみに、呪文はアーチャー ver. である。

・《オール・フォー・ワン全ては総て己が為》

ランク：EX レンジ：∞ 最大補足：∞

死鬼オリジナルの宝具。創世で神性を創った時にのみ発動する。万物、森羅万象を掌握する宝具であり、死鬼を象徴する宝具である。

神性がある時にしか発動しないので、死鬼自身はあまり使わない。（タイトル詐欺かな？）

・《モンスター怪物携帯用捕獲球》

ランク：E→EX レンジ：?? 最大補足：1人

モンスター怪物を捕まえる為の宝具。所持制限は一度に六つまでで、種類はモンスターボール→マスターボールまで様々である。

だが、そのボールの中から出て来るのは読者様方が思っている様な愛らしいものではなく、某ハンティングアクションゲームのモンスター達である。ああ、恐ろしや。

勿論、モンスターボールから古龍を繰り出すなんて事は出来ず、そのボールに対応し

たモンスターが出て来る使用になっている。

・《<sup>ア</sup>全<sup>ヴァ</sup>て遠<sup>ロ</sup>き理<sup>ン</sup>想郷》

ランク：EX 防御対象：1人

アーサー王伝説における常春の土地、妖精郷の名を冠した『約束された勝利の剣』の鞘。

能力は二つ。持ち主の老化を停滞させ、あらゆる傷を癒し、呪いを跳ね除ける効果と真名開放を行う事で数百のパーツに分解され、所有者を守る絶対防御能力である。前者は鞘を埋め込めば致命傷レベルの傷を受けても回復できる程である。後者の絶対防御は「この世界における最強の守り」と形容されるが、正確にはもはや防御というレベルではなく遮断。分解した鞘に含まれた対象はその瞬間のみ、妖精郷の壁によりこの世から隔離されることで、この世の理全てから断絶される。

その結果、あらゆる物理的・魔術的干渉は勿論の事、並行世界からのトランスライナーすら通用しない。多次元からの交信も六次元まで遮断するという。

言うなれば個人を対象とした移動要塞。

ブリテンを代表する魔術師マーリンが語った内容によれば、

「妖精郷とは、三次元に存在する地球より数次元分ずれた位相に存在する、所謂あの世や常春の国とも呼ばれる地。竜種を始めとする殆どの幻想種が西暦移行の住処と決めた、

”世界の裏側”と同一の場所”であるというもの。

要は使用者を七次元上の妖精郷に避難させる、というもの。

それ故、相手が現世に属する限り、何者にも侵害されぬ究極の一であり、世界最高峰の守り。魔法の域にある宝具である。

補足………というか追加能力

・ 全身の神経を隅々まで魔力回路にしているので、他の魔術師とは比べ物にならない本数を誇る。………投影による負担って何だっけ？

・ 成長の限界を取っ払ったことで、壁が無くなり、無限に強くなる。

・ 無限倉庫。そのまんまである。倉庫内の時間は止まっている。





.....  
うわぁ。  
何やこのチート。

YES！ウサギが呼びました！

第一話だそうですよ？

青年——『四季咲 死鬼』が転生して数ヶ月が経った。転生してからの数ヶ月は、特にこれといったイベントも何も起きず、毎日修行や、アルトリアとの組み手ばかりしていた。まあ、死鬼自身、そんな毎日が楽しいと思っていたので、これはこれで満足していた。

今日も日課の朝の鍛錬（弓と剣術、槍術と八極拳）を終え、アルトリアと軽く組み手をし、朝食を摂っていた。

「シキ、おかわりを所望します」

「はいはい、ちよつと待ってな。つーか、これで丼五杯目だぞ。よく食べるな、太らねえの？」

「ええ。私は太らない体質です。それよりもシキ、早くおかわりを」

「分かったよ、待ってるセイバ……ほい」

「ありがとうございます。シキ」

「どういたしまして。それよりセイバー」

「どうしました？」

「いや、この世界に来てからまだ何も起きてないからこの世界がどうゆう所なのか分かって無くてさ。セイバーは何か知らない？」

「いえ、私にもよく……。お役に立てず、申し訳ありません」

「ああいや、いいよ。時が来ればあちら側から接触してくるだろうし」

と、暢気に自分のサーヴァントと会話していると、目の前のテーブルに突如として、二つの封筒が出現した。

「……これは？」

「シキ。下がってください。何か違和感を感じます」

「ああ、この手紙からだな。これは……転移術式か？これを開けたら強制的に転移するようになっているのか」

「差出人は不明。どうしましょう、シキ」

「……開けてみよう。何か引つかかる」

前世の知識に何か引つかかる。そう感じた死鬼は、アルトリアの問いに開けようと言  
い、二人は同時に封筒を開けた。

そこにはこう記されていた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能を試すことを望むならば、己の家族  
を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの“箱庭”に来られたし。』

それと呼んだ死鬼はこの世界が何処なのかようやく分かった。

「…ああ。此処って問題児の…。セイバー、手を繋ごう。離れないように」

「?はい、わかりました」

(この後は多分…。『アレ』の準備をするか。)

手紙を読み終えた二人が(正確にはアルトリアが)何が起ころのか身構えていると、一  
瞬で二人はその世界から姿を消し——

完全無欠の異世界のはるか上空4, 000 mに放り出されてい  
た。

「『何処だ此処?!』」

「シキ!」

「セイバー! 手え放すなよ!」

アルトリアが周囲を見ると、自分達の他にも同じ境遇であろう者達が三人と一匹い  
た。

「シキ、あの人達を!」

「ああ分かってる!——行け! リオレウス! リオレイア! あの三人と一匹を頼む!」

アルトリアに言われた死鬼は、あらかじめ準備しておいた二つの『モンスターボール』  
から、『火竜 リオレウス』と『雌火竜 リオレイア』を出し、指示を飛ばした。

そして『創世』の能力を使い、『ドラグーン』を創り、アルトリアを乗せ、それぞれが  
地表に着陸した。

「信じられないわ！ 問答無用で引きずり込んだ挙句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだ、クソツタレ。石の中にも呼び出された方がまだマシだ」

「……………。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

軽口を叩いているヘッドホンの少年と気丈そうな少女。そして最後に無口なシヨトカットの少女は猫を抱き抱えながら無言で竜達の背中から降りてきた。

「此処……………どこだろう？」

「さあな。まあ、世界の果てつばいものが見えたり、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」  
(へえ、よく見てるな、あいつ)

「まあそんな事は置いといて、まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ？もしかしてお前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずは“オマエ”って呼び方を訂正してちょうだい。——私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、その猫を抱きかかえている貴女は？」

「……………春日部耀。以下同文」

「そう。よろしく春日部さん。それじゃあ、野蛮で凶暴そうなのこの貴方は?」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

「そして最後に、赤いジャージを着た貴方は?」

「俺か?俺は四季咲死鬼。それでこいつが」

「セイバーです。よろしくお願いします」

「ええ。よろしく死鬼さん、セイバーさん」

死鬼は、各々思い思いの自己紹介をする三人を見ながら、これから始まる事に思いを馳せ、ゆつくりと静かに笑った。



## 第二話だそうですね？

「で、呼び出されたはいいけど何で誰もいねえんだよ。この場合、招待状に書かれた『箱庭』の事を説明する人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうですね。なんの説明も無いままでは動きようが無いもの」

「……………」。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

いつまで経っても案内人が出て来ないと、苛立った十六夜が、そう口にした。

それに同意した二人も、同じように言った。

と、ここで何かに気づいたアルトリアが死鬼に念話で話し掛けてきた。

「あはは…。君もね…」

『シキ、あそこに誰かが…』

『うん、分かっている。俺がやろう』

「——」仕方がねえな。こうなったら、其処に隠れている奴にでも話を聞かか？」

「なんだ、貴方も気づいていたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの猫を抱いてる奴も気づいていたんだろ？」

「風上に立たれたら嫌でも分かる」

「……………へえ？面白いな、お前。それじゃあ死鬼も——死鬼？」

「……………其処な奴。十数える内に出て来なければ、貴様を爆撃する。『投影開始』」

死鬼はジャージのポケットの中で小石ほどの神秘が詰まった宝石を投影し、草むらの陰に隠れている者にそう言い放った。

「そら、出て来ないのか？……………ならば——「ちよちよちよちよつと待つて下さい！」…最初からそうすればいい物を」

死鬼が攻撃しようとするすると草むらから慌てて一人の人物が出て来た。

「や、やだなあ御五人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼と爆撃はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心に免じてここは一つ穩便にお話を聞いていただけたら嬉しいでござい

いますヨ?」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「返答次第……かな?」

「私もシキと同じです」

「あつは、取りつくシマも無いですね♪」

黒ウサギと名乗った少女はバンザイー、と降参のとつた。

すると、今度は耀と名乗った少女が不思議そうに黒ウサギの隣に立ち、頭に生えてい  
るウサ耳を根っこから驚掴み——

「えい」

「フギヤ!?!」

——力いっぱい引つ張った。

「ちよ、ちよつとお待ちを！触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!？」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります!」

「へえ？このウサ耳つて本物なのか？」

「……………。じゃあ私も」

「ちよ、ちよつと待——!」

今度は十六夜が右から、飛鳥が左から摑んで引つ張る。左右に力いっぱい引つ張られた黒ウサギは、言葉にならない悲鳴を上げ、その絶叫は近隣に木霊した。

ちなみに死鬼は十六夜達に弄られる黒ウサギを——

(説明まだかなあ)

——なんて思いながら、終始傍観に徹していた。

### 第三話だそうですね？

「——あ、あり得ない。あり得ないのでですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつところのような状況を言うに違いないのです」

「いいからさっさと進めろ」

いきなり空に放り出された事に対する仕返しだと言わんばかりに十六夜達に弄られ続けた黒ウサギ。さすがにこれ以上は話が進まんと思つた死鬼が彼等を止め、十六夜が説明を促す。

「それではいいですか、皆様。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言います！ようこそ『箱庭の世界』へ！我々は皆様にギフトを与えられたものたちだが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召還いたしました！」

「ギフトゲーム？」

「そうですね！既に気づいていらつしやるでしょうが、皆様は皆、普通の人間ではございま

せん！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその「恩恵」を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。飛鳥は質問するために挙手した。

「まず初歩的な質問からしていい？貴女の言う「我々」とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！ 異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある「コミュニティ」に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

「属していただきます！そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの「主催者」（ホスト）が提示した商品をゲットできると言うとってもシンプルな構造となっております」

今度は、耀が控えめに挙手した。

「……………「主催者」って誰？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございいます。特徴として前者は自由参加が多いですが、主権者が修羅神仏名だけあって凶悪かつ難解なものも多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。主権者次第ですが、新たな「恩恵」（ギフト）を手にすることも夢ではありません。後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればそれらは全て「主権者」のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「後者はかなり俗物ね………チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・利権・名誉・人間………そして、ギフトも賭けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えればより高度なギフトゲームに挑む事も可能でしょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能も失われるのであしからず。」

愛嬌たっぷりの笑顔だが、明らかに挑発的。そんな笑顔に同じく挑発的な声色で飛鳥が問いかける。

「なら最後にもう一つだけ、ゲームそのものはどうやったたら始められるの？」

「コミュニティ同士ของเกมを除けば、それぞれの期日内に登録していただければOK！商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのでよかったですら参加していただくいいな」

死鬼は黒ウサギの発言に関心した様に言った。

「……………ほう？じゃあつまり『ギフトゲーム』ってのはこの世界の法そのもの、つつー認識で良いのか？」

「おや？中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもつてのほか！そんな不逞な輩は悉く処罰します——が、しかし！『ギフトゲーム』の本質はまったく逆！一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。店頭に置かれている商品も、店側が提示したゲームをクリアすればタダで手にすることも可能だということですね」

「へえ、そりや中々、野蛮なこった」

「ごもつとも。しかし“主催者”は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければ良いだけの話でございま



す」

一通りの説明を終えたらしい黒ウサギは一枚の封書を取り出した。

「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんをいつまでも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我等のコミュニティでお話させていただきたいのですが……よろしいですか？」

「待てよ。まだ俺が質問して無いだろ」

静聴していた十六夜が威圧的な声を上げて立つ。ずっと刻まれていた軽薄な笑顔が無くなっている事に気づいた黒ウサギは、構えるように聞き返した。

「……………どういった質問ですか？ルールですか？ゲームそのものですか？」

「そんなものは『どうでもいい』。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。此処でオマエに向かつてルールを聞いたのだとしたところで何かが変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が

聞きたいのは………たった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

十六夜は視線を黒ウサギから外し、他の四人を見まわし、巨大な天幕によって覆われた都市に向ける。そして、何もかもを見下すような視線で言い放った。

「この世界は………『面白い』か？」

「——YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者達だけが参加できる神魔の遊戯。箱庭

の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保障いたします♪」

## 第四話だそうですよ？

「世界の果て？」

「そうそう！行ってみようぜ、世界の果て！」

黒ウサギの説明後、コミュニケーションへ向かうために森を歩いていた死鬼は、十六夜に「世界の果てへ行こう」と誘われていた。

「別に行っても構わないが、少し待て。セイバーに伝言をしておく」

「おう。頼んだぜ」

『セイバー』

『はい。何でしょう、シキ』

『十六夜に誘われた。少し世界の果てを見に行ってくる。黒ウサギが気付いたら騒ぎ出すだろうから説明を頼んだ。伝言は』——「で頼む』

『了解しました、シキ。御武運を』

『ああ。行ってくる』

「終わったか？」

「ああ。今終わったよ。それじゃあ行くかうか」

セイバーとの念話を終わらせた死鬼は、十六夜と共に上機嫌で此方に気付かない黒ウサギを横目で見ながら、世界の果てへ向かった。

—— 場所は変わって箱庭二一〇五三八〇外門。ペリベット通り・噴水広場前 ——  
十六夜と死鬼が世界の果てに向かつてしばらくたつた頃。残った飛鳥と春日部、黒ウサギは都市の外壁まで辿り着いていた。入り口には、一人の少年が座っており、それを見た黒ウサギは耳をピンとたてて走り寄って行った。

「ジン坊っちゃくん！新しい方を連れて参りましたよ〜！」

近づいて来る黒ウサギに笑顔を向ける少年は後ろにいる二人を見ると、待っていていましたと言わんばかりに声を掛けた。

「お帰り黒ウサギ。そちらの女性三人が？」

「はい！こちらの御五人様が……」

クルリと後ろを振り向いた黒ウサギはそこにいるはずの存在が見当たらず、カチンと体を固めた。

「……………え？あれ？もう二人いませんでしたっけ？ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児！』ってオーラを放っている殿方と、赤いジャージを着た殿方が……………」

「シキ達ならば、「ちよつと世界の果てまでイッテQしてくるわー」といつて途中で離脱しました」

「な、何で止めてくれなかったんですか！飛鳥さん！」

「知らないわよ。途中からいなくなったのは知ってたけど、聞かされてないんだもの」

「ならば、セイバーさん！どうして黒ウサギに教えてくれなかったのですか！」

「私には「説明よろしく」とだけ」

「た、大変です！世界の果てにはギフトゲームの為に野放しにされている幻獣が……………」  
「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に世界の果て付近には強力なギフトを持った者がいます。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」

「あら、それは残念。もう彼らはゲームオーバーなの？」

「……………ゲーム参加前にゲームオーバー？……………斬新？」

「冗談を言っている場合ではありませんっ!!!」

ジンと呼ばれた少年は彼等の身を案じているのか、事の重大さを必死に伝えようと声を張った。

「はあ……………ジン坊ちゃん。申し訳ありませんが、御三方のご案内をお願いしても宜しいでしょうか？」

「分かったよ。黒ウサギはどうするの？」

「問題児様方をを捕まえに参ります。事のついでに——『箱庭の貴族』と謳われるこの黒ウサギを馬鹿にした事、骨の髄まで後悔させてやります」

そう言った黒ウサギの黒い綺麗な長髪は桃色に染まり、ウサギ耳をピンと立てた。跳び上がった黒ウサギは外壁の傍にあつた門柱に水平に張り付き、飛鳥たちを見た。

「一刻ほどで戻ります！ 皆さんはゆっくりと素敵な箱庭ライフを御堪能くださいませ！」

黒ウサギは壁に亀裂が入るほどの力で跳びだして行つた。その速度は一瞬で飛鳥達の視界から消える程だった。

「……………。箱庭の兎は随分早く跳べるのね。素直に感心するわ」

「黒ウサギは箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思つたのですが……………」



黒ウサギの跳んで行った方角を心配そうな様子で見詰めるジン。そんなジンに飛鳥は明るめの声で話し掛けた。

「黒ウサギも堪能くださいと言っていたし、お言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましう。エスコートは貴方がしてくださいのかしら？」

「え、あ！はい！コミュニティのリーダーをしているジン＝ラッセルです。齢十一になつたばかりの若輩ですが宜しくお願いします。所でお三方の名前を伺つても宜しいでしょうか……？」

「私は、セイバーと申します」

「久遠飛鳥よ。そして、そこで猫を抱えているのが」

「……………春日部耀」

「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

飛鳥はジンの手を取ると、胸を躍らせるような笑顔で箱庭の外門をくぐつた。

## 第五話だそうですよ？

「そういや、死鬼よう」

「んあ？」

「何でお前、俺の速さに着いてこれんだよ？」

「何でって言われてもなあ……………」

「自分で言うのも何だが、俺結構な速さで走ってるぜ？」

「知ってるよ。今は時速750kmってところか……………。問題無いよ。充分、余裕を持って着いて行けるよ」

「そうか……………。それがお前のギフトって奴か？」

「うんにゃ。これは素の身体能力さね。力も能力もギフトだって使っちゃいない純粋な脚力で走っている」

「へえ。やっぱお前、面白い奴だな」

「それどうも。それより、どうやら着いたみたいだぞ」

しばらく走っていた森が拓け、そこに広がっていたのは――

「ほう……………」 「こりやすごい……………」

——息を呑むような美しい滝だった。遙か高くから流れ落ちる水は、濁りなど知らな  
いかのような透明感がある。辺りを囲う草木には、一層の青々しさが感じられる。二人  
はまるで美しい宝石を見ているようだと感じた。

「……………」 「こりやあ、来て正解だったな」

「ああ……………」 。俺もここまで凄いとは思って無かったぜ」

この壮大なそして美しい景色に死鬼達は心を奪われていた。そんな中、滝壺の方から  
大きな音をたてながらナニカが姿を現した。そこから現れたのは大蛇。その巨大さは、  
人など比べるのもおこがましい程だった。

『何故人間の小僧がこんな所にいる』

大蛇は威圧を籠めた声で死鬼達に話しかけた。

「何故って………。俺等は世界の果てを見に來ただけだ。それ以外に目的はない」

『ふむ、そうか。だが此処は私の縄張りだ。入って來たからにはギフトゲームを受けてもらおう』

「へえ？それで、どんなゲームをするんだ？」

『お前達が私を倒せるかを試すのだ』

「………ハッ！テメエごときが俺等に試練だと？寝言は寝て言えよ爬虫類。………むしろテメエが俺等を試せるのか試したい位だぜ？」

『良いだろう………貴様等が誰に喧嘩を売ったのかを解らせてやる！後悔するなよ！』

「ヤハハ！後悔するのはテメエの方だ、爬虫類！」

「十六夜、俺の分も残しといてね？」

「おう！」

『があああああツツツ！』

「おいおいどうしたあつ！あんだけの大口たたいておいてテメエはその程度なのかよ

!？」

『グウツ……! 舐めるなよ小僧オオオオ!』

「ハツ! そう来なくつちやなあああつ!」

ズガアアアアアアン!!!!

派手な音をたてながら大蛇(神格を持っている事から蛇神と呼ぶ事にする)は滝壺に叩きつけられた。

「ふう……………」

「随分派手にやったなあ」

「そうか? あまりにも手応えが無かったからな……………」

十六夜は首をコキリと鳴らしながらそういった。

「この辺りの筈……………」

十六夜が死鬼と話していると、髪の色を桃色に変えた黒ウサギが現れた。

「お？お前、黒ウサギか？どうしたんだその髪の色」

黒ウサギは死鬼達の方を振り返ると肩を震わせながらキツと睨み、大声をあげた。

「あ、貴方方は————っ！一体全体何処まで来てるんですかっ!？」

「世界の果てまで来てるんですよと。まあそんな怒るなつて」

「誰のせいだと思ってるのですか！」

「悪いな黒ウサギ。少し興味があつたからな」

が。  
十六夜の子憎たらしい笑顔も健在だ。死鬼の方は、少しばかり罪悪感があるようだが。

「しっかし黒ウサギ。お前いい足持ってるな。幾分か遊んでたとはいえ、この短時間で俺等に追いつくとは思わなかつたぞ？」

「むっ、それは当然です。なんとたつて黒ウサギは“箱庭の貴族”と謳われる優秀な貴種です。その黒ウサギが——」

黒ウサギはアレツ?と首をかしげた。

(黒ウサギが……………半刻以上もの時間、追いつけなかった……………?)

「おーい黒ウサギ。大丈夫かー?」

「……………はっ!ま、まあそれはともかく!御二方が無事でよかったです。水神のゲームに挑んだと聞いて肝を冷やしましたよ」

「水神?——ああ、アレの事か?」

十六夜は先程滝壺に叩きつけられたところを回復し、怒りの叫びをあげながら滝壺から勢いよく飛び出してきた蛇神を指差した。

『まだ……………まだ試練は終わって無いぞ、小僧オ!!』

「蛇神!……………って、どうやったらかんなんにも怒らせられるんですか十六夜さん!」

「何、簡単だよコイツが何か偉そうに『身の程を教えてやる』なんて言うもんだからな。その態度に出れるほどの力があるのかと思っただけが試し返した、って言う流れだよ。ま、今んところは不合格。ただのデカイ爬虫類って認識だな」

『付け上がるなよ小僧！我はこの程度では倒れはせんぞ!!』

「蛇神はそう叫ぶと辺りの水を巻き込み、巨大なそして激しい水流の竜巻を作り出した。それは豪雨、津波、渦潮……様々な天災の混じり合ったかのようなモノだった。

「!?十六夜さん、下がって!」

「何を言ってるんだよ黒ウサギ。下がんのはテメエの方だろうが。これは俺が売って、奴が買った喧嘩だ。手え出せばお前から潰すぞ!」

「俺じゃなくて俺達な。黒ウサギの言うとおりだ、下がれ十六夜。「俺の分も残しとけ」って言ったろ?ここからは俺のターンだ!」

「ああ、そういやそうだったな。悪い悪い。それじゃあ、なるべく愉快に華麗に吹っ飛ばしてくれよ?」

「フツ、善処しよう」

『その心意気は買ってやろう。それに免じ、この一撃を凌げば貴様等の勝利を認めてやる!』

「———そうかい。そいつはありがたいなあ」



蛇神は先程の竜巻に水柱を加えた更なる威力のモノを形成した。人間が喰らえば死は免れないだろう。

「死鬼さんっ!!」

「大丈夫だよ黒ウサギ。俺は問題ない。——さて、行くのでしょうか。『投影開始』」

黒ウサギ下がるように指示を出した死鬼は、その手に先程投影したような宝石を数個、新たに投影した。

そして——

(準備は万端、宝石は投影済み。後はこの竜巻のみ——!)

「万物よ、還元せよ! 《始原》!」

死鬼がそう唱えた瞬間、死鬼に直撃しようとしていた竜巻が、突然消失した。まるで、元在った場所へ還ったかのように。

「嘘!?!」



(人間が……神格を倒した!? そんなデタラメが……)

ハツと黒ウサギは思い出す。彼等を召喚するギフトを与えた「主催者」の言葉を。

『彼等は間違いなく——人類最高クラスのギフト保持者よ、黒ウサギ』

そして同時に——

(この方達なら、コミュニティ再建も夢じゃないかもしれない!)

そう思い、期待に胸を膨らませた。

## 第六話だそうですよ？

「きゃーきゃーきゃー♪見てください！こんなに大きな水樹の苗を貰いました！コレがあればもう他所のコミュニティから水を買う必要もなくなります！みんな大助かりです！」

ウツキヤールなんて奇声を上げながら水樹と呼ばれる苗を抱きしめてクルクルと跳び回る。十六夜にコミュニティや箱庭の事情は分からないが、彼女にはとても重要な物らしい。すると、今まで何処に行っていたのか先程から姿を消していた死鬼が戻ってきた。『一人の女性』を連れて。

「喜んで貰えて何よりだ、黒ウサギ。それよりも一つ聞いていいか？」

「どうぞどうぞ！——つて、死鬼さんは今までどちらに？そしてその方はいったい？」

「あ、こいつ？さっきの蛇神」

「ほえ？」

「挑んだのは俺達二人だろ？で、十六夜の報酬はその水樹？だっけ？その苗だろ？それ

じゃあ俺もつて事でこいつに隷属してもらった」

「この度、ご主人に隷属する事になった『白雪姫』という。白雪と呼んでくれ」

「ほ、ほえ〜〜〜……。あ、黒ウサギです。よろしくお願いします」

「ヤハハハハハ！ やつぱお前つて面白いな死鬼！」

「そうか？ それよりも、さつきも言ったが、一つ聞いてもいいか？」

「あ、はい。勿論いいのですヨ！ 今なら一つと言わず三つでも四つでもお答えしますよ  
♪」

「そうか……。じゃ、遠慮無く聞かせて貰うぞ？」

——— 黒ウサギ、お前俺達にすつげえ重要な事隠してない？」

「……………何のことですか？ 箱庭の話ならお答えしますと約束しましたし、ゲームの事m「違うね。俺が……………いや、『俺達』が聞いているのは君達の事——— ふう、ここは核心を突いたほうがいいか……………。黒ウサギ、君達はこうして『俺達を態々異世界から呼び出す必要』があつたんだ？」……………ッ！」

かろうじて表情には出さなかったものの、黒ウサギの動揺は激しかった。なぜなら、

死鬼が質問した内容は黒ウサギが意図的に隠していたものだからだ。

「それは……言ったとおりです。死鬼さん達にオモシロオカシク過ごしてもらおうt  
「ああ、そうだな。俺も初めは純粋な好きか、もしくは与り知らない誰かの遊び心で呼び  
出されたんだと思っていた。十六夜はどうせ暇だったんだろうし、ほかの二人も異論が  
上がらなかつたって事は、箱庭に来るだけの理由はあつたんだろうさ。だから君達の事  
情はとりあえず後回しにして置いたんだが——なんだかな。俺達、少なくとも俺に  
は、黒ウサギは必死に見えるな」………」

その時、初めて黒ウサギは動揺を表情に出した。瞳は揺らぎ、死鬼の事を虚を衝かれ  
たように見つめ返した。とここで、黒ウサギの横にいた十六夜からも追撃が入る。

「俺も疑問に思ってた。これは俺の勘だが。黒ウサギのコミュニケーションは弱小のチー  
ムか、もしくは訳あって衰退しているチームか何かじゃねえのか？だから俺達はその組織  
を強化する為に呼び出された。そう考えれば今の行動や、俺等がコミュニケーションに入るの  
を拒否した時に本気で怒った事も合点がいく——どうよ？一〇〇点満点だろ？」

「っ……………」

黒ウサギは内心で痛烈に舌打ちした。この時点でそれを知られてしまうのは余りにも手痛かった。苦勞の末に呼び出した五人もの超戦力、手放すような事は絶対に避けたかった。

「んで、この事実を隠していたって事はだ。俺達にはまだ他のコミユニティを選ぶ権利があると判断出来るんだが、その辺どうよ？」

「……………」

「沈黙は是也、だよ黒ウサギ。この状況で唯黙り込んでも状況は悪化するだけだ。俺と十六夜が他のコミユニティに行ってもいいのか？」

「や、だ、駄目です！いえ、待って下さい！」

「だから待つてるだろ。ホラ、いいから包み隠さず話せ」

十六夜は川辺にあつた手ごろな岩に腰を下ろし、死鬼は傍にあつた木に寄り掛かり、聞く姿勢をとつた。しかし黒ウサギにとって今のコミユニティの状態を話すのは余りにもリスクが大きかった。

「ま、話さないなら話さないでいいぜ？俺はさっさと他のコミュニティへ行くだけだ」

「……………話せば協力して頂けますか？」

「ああ。『面白ければ』な」

「……………分かりました。それではこの黒ウサギもお腹を括つて、せいぜいオモシロオカシク、我々のコミュニティの惨状を語らせて頂こうじゃないですか」

コホン、と咳払い。黒ウサギはポツリポツリと語りだした。



## 第七話だそうですよ？

「まず、私達のコミュニティには名乗るべき『名』がありません。よって呼ばれる時は名前の無いその他大勢、『ノーネーム』という蔑称で称されます」

「へえ………その他大勢扱いかよ。それで？」

「次に私達にはコミュニティの誇りである旗印もありません。この旗印というのはコミュニティのテリトリーを示す大事な役目も担っています」

「ふうん？それで？」

「『名』と『旗印』に続いてトドメに、中核を成す仲間達は一人も残っていません。もつとぶつちやけてしまえば、ゲームに参加出来るだけのギフトを持っているのは一二人中、黒ウサギとジン坊ちゃんだけで、後は十歳以下の子供ばかりなのですヨ！」

「もう崖っぷちだな！」

「ていうか、もうアウトじゃね？」

「ホントですねー♪って死鬼さん！まだぎりぎりセーフなのですヨ！」

十六夜と死鬼の冷静な言葉にウフフと笑う黒ウサギは、ガクリと膝をついて項垂れ

た。口に出してみると、本当に自分達のコミュニティが末期なのだなーと思わずにはいられなかった。

「で、どうしてそうなったんだ？黒ウサギのコミュニティは託児所でもやってんのか？」  
「いえ、彼等の親も全て奪われたのです。箱庭を襲う最大の天災——『魔王』によつて」

『魔王』——その単語を聞いた途端、適当に相槌を打っていた十六夜が初めて声を上げた。

「ま……………マオウ!？」

その瞳はさながらショーウィンドウに飾られる新しい玩具を見た子供の様に輝いていた。

「魔王！なんだよそれ、魔王って超カッコイイじゃねえか！箱庭には魔王なんて素敵ネーミングで呼ばれる奴がいるのか!？」

「え、ええまあ。けど十六夜さんが思い描いている魔王とは差異があると……」

「そうなのか？ けど魔王なんて名乗るんだから強大で凶悪で、全力で叩き潰しても誰からも咎められる事の無いような素敵に不適にゲスい奴なんだろう？」

「ま、まあ………倒したら多方面から感謝される可能性はございます。倒せば条件次第で隷属させる事も可能ですし」

「へえ？」

「魔王は『主催者権限』という箱庭における特権階級を持つ修羅神仏で、彼等にギフトゲームを挑まれたが最後、誰も断る事ができません。私達は『主催者権限』を持つ魔王のゲームに強制参加させられ、コミュニティは………コミュニティとして活動していく為に必要な全てを奪われてしまいました」

「けど名前も旗印も無いというのは結構不便な話だな。何より縄張りを主張出来ないのは手痛い。新しく作ったらどうなんだ？ 黒ウサギ？」

「そ、それは」

死鬼の言葉に、黒ウサギは言い淀んで両手を胸に当てた。死鬼の指摘は正しかった。名も旗印も無いコミュニティは誇りを掲げる事も出来ず、名に信用を集める事も出来ない。この箱庭において名と旗印が無いという事は、周囲に組織として認められないとい

う事だ。だからこそ黒ウサギ達は、異世界から同士の召喚という最終手段に望みを掛けていたのだ。

「か、可能です。ですが改名はコミュニケーションの完全解散を意味します。しかしそれでは駄目なのです！私達は何よりも……仲間達が帰ってくる場所を守りたいのですから………！」

仲間の帰る場所を守りたい。それは黒ウサギが初めて口にした、掛け値の無い本心だった。『魔王』とのゲームによって居なくなつた仲間達の帰る場所を守る為、彼女達は周囲に蔑まれる事になろうとも、コミュニケーションを守るといふ誓いを立てたのだ。

「茨の道ではありません。けど私達は仲間が帰る場所を守りつつ、コミュニケーションを再建し………何時の日か、コミュニケーションの名と旗印を取り戻して掲げたいのです。その為には十六夜さんや死鬼さん達のような強大な力を持つプレイヤーを頼るほかありません！どうかその強大な力、我々のコミュニケーションに貸して頂けないでしょうか………!!」

「………ふうん。魔王から誇りと名前をねえ」

深く頭を下げて懇願する。しかし必死の告白に十六夜は気の無い声で返す。その態度は黒ウサギの話聞いていたとは思えない。黒ウサギは肩を落として泣きそうな顔になっていた。

(……で断られたら……私達のコミュニティはもう……!)

黒ウサギは唇を強く噛む。こんな後悔をするなら、初めから話せば良かったと思っただ。肝心の十六夜は組んだ足を気だるそうに組み直し、たつぷり三分間黙り込んだ後。

「いいな、それ」

「……………は？」

「HA?じゃねえよ。協力するって言ったんだ。もっと喜べ黒ウサギ」

不機嫌そうに言う十六夜。呆然として立ち尽くす黒ウサギは二度三度と聞き直す。

「え……………あ、あれれ?今の流れってそんな流れでございましたか?」

「そんな流れだったぜ。それとも俺がいらねえのか。失礼な事言うとは本気で他所行く

ぞ」

「だ、駄目です駄目です、絶対に駄目です！十六夜さんは私達に必要です！」

「素直で宜しい。さて、後は死鬼だが……お前は どうする？」

「……………」

「死鬼さん……………」

「ご主人……………」

「……………いいぜ、協力する。其方の方が面白そうだからな」

「……………」

「ご主人がそう言うなら、私はそれに従おう」

「ありがとうございます！御三方！これで、これで黒ウサギ達のコミュニティは……………」

「……………」

「おいおい泣くなよ黒ウサギ。ほら、早く飛鳥ちゃん達と合流しようぜ」

「はい！此方です！」

そうやって死鬼達を案内する黒ウサギの顔はその日一番の笑顔だったそうなの。

## 第八話だそうですよ？

「な、何であの短時間に『フオレス・ガロ』のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!?」「しかもゲームの日取りは明日!?」「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!」「準備している時間もお金もありません!」「一体どういう心算があつての事です!」

日が暮れた頃に噴水広場で合流し、話を聞いた黒ウサギは案の定ウサ耳を逆立てて怒っていた。突然の展開に嵐の様な説教と質問が飛び交う。

「ムシヤクシヤしてやった。反省はしているが、後悔はしていない」

「黙らっしゃい!!!」

誰が言い出したのか、まるで口裏を合わせていたかのような言い訳に激怒する黒ウサギ。

「すみませんシキ。止めようとはしたのですが……………」

「ああ、まあ仕方ないね。セイバーはそういうの許せない性格だし」

「すみません……………」

その横では、自分のした事に責任を感じているらしいアルトリアを、死鬼が必死で励ましていた。すると、今まで暴れている黒ウサギをニヤニヤと笑って見ていた十六夜が止めに入った。

「別にいいじゃねえか。見境無く選んで喧嘩売った訳じゃないんだから許してやれよ」

「い、十六夜さんは面白ければいいと思っっているかも知れませんが、このゲームで得られる物は自己満足だけなんですよ？この『契約書類』を見てください」

黒ウサギの見た『契約書類』は『主催者権限』を持たない物達が『主催者』と成ってゲームを開催する為に必要なギフトである。そこにはゲームの内容・ルール・チップ・商品が書かれており『主催者』のコミュニティのリーダーが署名する事で成立する。黒ウサギが指す商品の内容はこうだ。



「参加者が勝利した場合、主催者は参加者の言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニティを解散する」か——ま、確かに自己満足だな。時間をかければ立証できる物を、態々取り逃がすリスクを背負ってまで短縮させるんだからな」

ちなみに飛鳥達のチップは「罪を黙認する」という物だ。それは今回に限った事ではなく、これ以降もずっと口を閉ざし続けるという意味である。

「でも時間さえかければ、彼等の罪は必ず暴かれます。だって肝心の子供達は………その………」

黒ウサギが言い淀む。彼女も「フォレス・ガロ」の悪評は聞いていたが、そこまで酷い状況になっているとは思っていなかったのだろう。

「そう。人質は既にこの世にいないわ。その点を責め立てれば必ず証拠は出るでしょう。だけどそれには少々時間がかかるのも事実。あの外道を裁くのにそんな時間をかけたくないの」

箱庭の法はあくまで箱庭都市内でのみ有効な物だ。外は無法地帯になっており、様々な種族のコミュニティがそれぞれの法とルールの下で生活している。そこに逃げ込まれては、箱庭の法で裁く事はもう不可能だろう。しかし「契約書類」による強制執行ならばどれだけ逃げようとも、強力な「契約」でガルドを追い詰められる。

「それにね、黒ウサギ。私達は道徳云々よりも、あの外道が私の活動範囲内で野放しにされる事も許せないの。ここで逃せば、いつかまた狙ってくるに決まってるもの」

「ま、ま………逃せば厄介かもしれないけれど」

「僕もガルドを逃がしたくないと思っている。彼のような悪人は野放しにしちゃいけない」

ジンも同調する姿勢を見せ、黒ウサギは諦めた様に頷いた。

「はあく………。仕方が無い人達です。まあいいです。腹立たしいのは黒ウサギも同じです。『フォレス・ガロ』程度なら十六夜さんと死鬼さんがいれば楽勝でしょう」

それは黒ウサギの正当な評価のつもりだった。しかし十六夜と飛鳥は怪訝な顔を  
して、

「何言つてんだよ。俺は参加しねえよ？」

「当たり前よ。貴方達は参加なんてさせないわ」

フン、と鼻を鳴らす二人。黒ウサギは慌てて二人に食つて掛かった。

「だ、駄目ですよ！御二人はコミュニケーションの仲間なんですからちゃんと協力しないと」

「そういう事じゃないんだよ黒ウサギ」

「死鬼さん？」

「いいかい黒ウサギ？この喧嘩は飛鳥ちゃん達が売つて、それを相手が買ったんだ。な  
のにそれに俺達が加入するのは無料だつて事だよ」

「あら、分かつているじゃない」

「それに、セイバーが出るなら俺は出る幕無いしね」

「？それつてもしかしてセイバーさんだけで十分で、私達は戦力外だと？」

「そうなのか？ご主人？」

「うんにゃ。別にそこまでじゃないけれど、セイバーと飛鳥ちゃん達の実力が離れ過ぎているのは事実かな。多分だけど、最低でも十六夜の十倍は強い」

「へえ。俺の方が弱いと？」

「まあ、結果的に？」

と、死鬼が放った十六夜弱い発言に案の定ピクツと反応した十六夜が額に青筋を立てた。

「シキ。私はそこまで強くありません。私はまだ未熟だ。まだまだもつと腕を磨かなければならない。それにイザヨイにも失礼だ」

「ああ、うん。そりゃそうか。悪い十六夜。それとセイバー。お前アレで未熟っておかしいから。間違い無く達人級だから」

「いや、問題は無えよ。逆にセイバー。お前に興味が出てきた」

「……………。ああ、もう好きにして下さい」

丸一日振り回され続けて疲弊した黒ウサギは会話に入り込む気力も言い返す気力も残っていない。どうせ失う物は無いゲーム、もうどうにでもなればいと呟いて肩

を落とすのだった。

## 第九話だそうですよ？

「そろそろ行きましようか。本当は皆さんを歓迎する為に素敵なお店を予約して色々セッティングしていたのですけれども……不慮の事故続きで、今日はお流れとなつてしまいました。また後日、きちんと歓迎を致しますので」

椅子から腰を上げた黒ウサギは、横に置いてあつた水樹の苗を大事そうに抱き上げると、コホンと咳払いして全員にそう切り出した。だが、

「いいわよ、無理しなくて。私達のコミュニティつてそれはもう崖っぷちなんでしょう？」

「ええ、アスカの言うとおりです。私達は望んで此処に来たのです。貴女が気にする必要ありません」

飛鳥とセイバーの言葉を聞いて驚いた黒ウサギはすかさずジンを見た。彼の申し訳なさそうな顔を見て、自分達の事情を知られたのだと悟る。ウサ耳まで赤くした黒ウサ

ギは恥ずかしそうに頭を下げた。

「も、申し訳ございません。皆さんを騙すのは気が引けたのですが……黒ウサギ達も必死だったのです」

「頭を上げてください、クロウサギ。私は組織の水準なんてどうでもいいのです。アスカもヨウも同じ筈です」

「そうよ。私もセイバーに同感。春日部さんはどう？」

黒ウサギが恐る恐る耀の顔を窺う。耀は無関心なままに首を振った。

「私も怒ってない。そもそもコミュニティがどうの、というのは別にどうでも……あ、けど」

思い出した様に迷いながら呟く耀。ジンはテーブルに乗り出して問う。

「どうぞ気兼ねなく聞いてください。僕等に出来る事なら最低限の用意はさせてもらいます」

「そ、そんな大それた物じゃないよ。ただ私は………毎日三食お風呂付きの寝床があればいいな、って思っただけだから」

ジンの表情が固まった。この箱庭で水を得るには買うか、もしくは数kmも離れた大河から汲まねばならなかった。水の確保が大変なこの土地でお風呂というのは、一種の贅沢品なのだ。

その苦勞を察した耀は慌てて取り消そうとしたが、先に黒ウサギが嬉々とした顔で水樹を持ち上げる。

「それなら大丈夫です！十六夜さん達がこんなに大きな水樹の苗を手に入れてくれましたから！これで水を買う必要もなくなりますし、水路を復活させることもできますよ！」

一転して明るい表情に変わる。これには飛鳥も安心したような顔を浮かべた。

「私達の国では水が豊富だったから毎日のように入れてたけど、場所が変われば文化も違うものね。今日は理不尽に湖に投げ出されたから、お風呂には絶対入りたかったところよ」



「それには同意だぜ。あんな手荒い招待は二度と御免だ」

「そうだねー。黒ウサギには悪いけど、俺もそれには同感だ。なんせ、手紙を開けたらいきなり上空4000mに放り出されたんだからねー」

「あう……………そ、それは黒ウサギの専門外の事ですよ……………」

死鬼とセイバー、そして白雪以外の召喚された三人からの責めるような視線に怖気づく黒ウサギ。ジンも隣で苦笑する。

「あはは……………それじゃあ今日はコミュニティへ帰る？」

「あ、ジン坊ちゃんには先にお帰りください。ギフトゲームが明日なら『サウザンドアイズ』に皆さんのギフト鑑定をお願いしないと。この水樹の事もありますし」

死鬼達六人は首を傾げて聞き直す。

「『サウザンドアイズ』？コミュニティの名前か？」

「YES。『サウザンドアイズ』は特殊な『瞳』のギフトを持つ者達の群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸い

「この近くに支店がありますし」

「ギフトの鑑定というのは？」

「勿論、ギフトの秘めた力や起源などを鑑定する事デス。自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなります。皆さんも自分の力の出処は気になるでしょう？」

同意を求める黒ウサギに十六夜、飛鳥、耀の三人は複雑な表情で返す。思う事はそれぞれあるのだろうが、拒否する声はなかった。しかし、死鬼達主従組は、

「うーん……………。俺は自分の力がどういう物なのか解ってるから別にいいんだよなあ……………」

「私もご主人に同意する。私は元々この世界の住人だからな。自分のギフトは理解している」

「ええ。私もです。そもそも私は自分の力を解っていないと此処にはいないので」

「あー、そっか。セイバーの場合はそうなるか」

「へえ？ どういう事だ？ 死鬼」

セイバーと死鬼の言った言葉に疑問を持った十六夜が死鬼に聞いた。

「セイバーの場合、自分の力⇨自分の名前になっちゃうんだ」

「「「「?」」」」

「あー……。要するに、有名人なんだよ。セイバーは」

「その力の名前さえ解れば本名が割れるほどにか？」

「ああ。そういう事」

「ふーん？ますます興味がわいてきたな」

そんな事を話しながら、七人と一匹は「サウザンドアイズ」に向かっていった。

## 第十話だそうですよ？

しばらく歩いて行くと黒ウサギが振り返る。どうやら着いたようだ。商店の旗には、蒼い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記されている。あれが「サウザンドアイズ」の旗なのだろう。

日が暮れて看板を下げる割烹着の女性店員に、黒ウサギは滑り込みでストップを――

「まっ」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません」

――かける事も出来なかった。黒ウサギは悔しそうに店員を睨みつける。

（さすがは超大手の商業コミュニティ。客の拒み方に隙がない）

「なんて商売っ気の無い店なのかしら」

「ま、まったくです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」  
「出禁!?!これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ!?!」

キヤーキヤーと喚く黒ウサギに、店員は冷めたような眼と侮蔑を込めた声で対応する。

「なるほど、〃箱庭の貴族〃であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか?」

「……………」

一転して言葉に詰まる黒ウサギ。しかし十六夜は何の躊躇いも無く名乗る。

「俺達は〃ノーネーム〃ってコミュニティなんだが」

「ほほう。ではどこの〃ノーネーム〃様でしょう。よかつたら旗印を確認させていただいてもよろしいでしょうか?」

ぐ、っと黙りこむ。黒ウサギが言っていた〃名〃と〃旗印〃が無いコミュニティのり

スクとはまさにこういう状況の事だった。

（ま、まずいです。〃サウザンドアイズ〃の商店は〃ノーネーム〃御断りでした。このままだと本当に出禁にされるかも）

力のある商店だからこそ彼等は客を選ぶ。信用できない客を扱うリスクを彼等は冒さない。

全員の視線が黒ウサギに集中する。彼女は心の底から悔しそうな顔をして、小声で呟いた。

「その……………あの……………私達に、旗はありm」

「いいいいいいやっほおおおおお！久しぶりだ黒ウサギイイイイイ！」

黒ウサギは店内から爆走してくる着物風の服を着た真っ白い髪の少女に抱き（もしくはフライングボディーアタック）つかれ、少女と共にクルクルクルクルと空中四回転半ひねりして街道の向こうにある浅い水路まで吹き飛んだ。

「きゃあーーーーー……………」

ボチャン。そして遠くなる悲鳴。

死鬼と十六夜達は目を丸くし、店員は痛そうな頭を抱えていた。

「……………うわあ。なにあれ」

「……………おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか？なら俺も別バージョンで是非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

真剣な表情の十六夜に、真剣な表情でキツパリ言い切る女性店員。二人は割とマジだった。

フライングボディータックで黒ウサギを強襲した白い髪の幼女は、黒ウサギの胸に顔を埋めてなすり付けていた。





ウウウウウウウ………!!!

十六夜にパスされた死鬼は慌てて少女を蹴り上げ、『炎を纏った脚』で十六夜に蹴り返した。

火達磨になった少女が自分に向かってきているのを見て、十六夜は急いでしゃがみ、少女をかわした。

そのまま少女は、再び水路へと叩き落された。

「ゴバア!!お、おんし等、飛んできた初対面の美少女を足で受け止め、しかも炎の脚で蹴り返すとは何様だ!」

「十六夜様だぜ。以後よろしく和装ロリ」

「四季咲死鬼だ。よろしくな、和服の」

笑いながら自己紹介する十六夜と死鬼。

一連の流れの中で呆気にとられていた飛鳥は、思い出したように白夜叉に話しかけた。

「あなたはこの店の人？」

「おお、そうだと。この『サウザンドアイズ』の幹部様で白夜叉様だよ御令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢の割に発育がいい胸をワンタッチ生揉みで引き受けるぞ」「オーナー。それでは売上が伸びません。ボスが怒ります」

何処までも冷静な声で女性店員が釘を刺す。

濡れた服やミニスカートを絞りながら水路から上がってきた黒ウサギは複雑そうに  
呟く。

「うう……まさか私まで濡れる事になるなんて」

「因果応報………かな」

『御嬢の言う通りや』

悲しげに服を絞る黒ウサギ。

反対に濡れても全く気にしていない白夜叉は、店先で死鬼達を見回してニヤリと笑った。

「ふむ。お前達が黒ウサギの新しい同士か。異世界の人間が私の元に來たという事は……遂に黒ウサギが私のペットに」

「なりません！ どういう起承転結があつてそんなことになるんですか！」

ウサ耳を逆立てて怒る黒ウサギ。何処まで本気かわからない白夜又は笑つて店に招く。

「まあいい。話があるなら店内で聞こう」

「よろしいのですか？ 彼らは旗も持たない『ノーネーム』のはず。規定では」

「『ノーネーム』だと分かつていながら名を尋ねる、性悪店員に対する佯びだ。身元は私が保証するし、ボスに睨まれても私が責任を取る。いいから入れてやれ」

む、つと拗ねるような顔をする女性店員。彼女にしてみればルールを守つただけなのだから気を悪くするのは仕方がない事だろう。

「お前も大変だな。良ければ、今度愚痴でも聞こう」

「私も手伝いますよ」

「……………ありがとうございます」

そんな女性店員に白雪とセイバーが慰めていた。そして白夜叉を某超次元サッカーシュートでけり返した死鬼は、

(ギフト鑑定……………まだかなあ……………)

そんな事を考えながらのほんとしていた。

## 第十一話だそうですよ？

暖簾をくぐった八人と一匹は、店の外観から考えられない、不自然な広さの中庭に出た。

正面玄関を見れば、ショーウィンドに展示された様々な珍品名品並んでいる。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

八人と一匹は和風の中庭を進み、縁側で足を止める。

障子を開けて招かれた場所は香の様な物が焚かれており、風と共に八人の鼻をくすぐる。

個室というにはやや広い和室の上座に腰を下ろした白夜叉は、大きく背伸びをしてから死鬼達に向き直る。気がつけば、彼女の着物はいつの間にか乾ききっていた。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている  
“サウザンドアイズ” 幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュ

ニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい、お世話になっております本当に」

投げやりな言葉で受け流す黒ウサギ。その隣で耀が小首を傾げて問う。

「その外門、つて何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者達が住んでいるのです」

此処、箱庭の都市は上層から下層まで七つの支配層に分かれており、それに伴ってそれぞれを区切る門には数字が与えられている。

外壁から数えて七桁の外門、六桁の外門、と内側に行くほど数字は若くなり、同時に強大な力を持つ。箱庭で四桁の外門ともなれば、名のある修羅神仏が割拠する完全な人外魔境だ。

黒ウサギが描く上空から見た箱庭の図は、外門によって幾重もの階層に分かれている。

その図を見た問題児組三人は口を揃えて、

「……………超巨大タマネギ？」

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」

「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

うん、と頷き合う三人。身も蓋もない感想にガクリと肩を落とす黒ウサギ。

死鬼達主従組は、

(（自分達には木の年輪に見える）)

と思っていた。

対照的に、白夜又はカカカと哄笑を上げて二度三度と頷いた。

「ふふ、うまいこと例える。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。更に説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は“世界の果て”と向かい合う場所になる。あそこにはコミユニティに

所属していないものの、強力なギフトを持った者達が棲んでおるぞ——その水樹の持ち主である白雪などな」

白夜又は薄く笑って黒ウサギの持つ水樹の苗と白雪に視線を向ける。

「して、一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？知恵比べか？勇気を試したのか？そもそもなぜ白雪が此処におる？おんしはトリトニスの大滝を縄張りとしていただろう？」

「いえいえ。この水樹は十六夜さんがここに来る前に、白雪様を素手で叩きのめし、死鬼様が宝石で止めを刺したのですよ。そして、報酬として十六夜様はこの水樹を、死鬼様は白雪様を隷属させたのですよ」

自慢げに黒ウサギが言うと、白夜又は声を上げて驚いた。

「なんと!?!クリアではなく直接的に倒したとな!?!ではその童達は神格持ちの神童か?」

「いえ、黒ウサギはそう思えません。神格なら一目見れば分かるはずですし」

「む、それもそうか。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほど崩れ



たパワーバランスがある時だけのはず。種族の力でいうなら蛇と人ではドングリの背比べだぞ」

神格とは生来の神様そのものではなく、種の最高のランクに体を変幻させるギフトを指す。

蛇に神格を与えれば巨躯の蛇神に。

人に神格を与えれば現人神や神童に。

鬼に神格を与えれば天地を揺るがす鬼神と化す。

更に神格を持つことで他のギフトも強化される。箱庭にあるコミュニティの多くは各々の目的のため神格を手に入れることを第一目標とし、彼等は上層を目指して力を付けているのだ。

「白夜叉様は白雪様とお知り合いだったのですか？」

「知り合いも何も、白雪に神格を与えたのはこの私だぞ？」

「もう何百年も前の話ですよ」

小さな胸を張り、カカカと豪快に笑う白夜叉。

だがそれを聞いた十六夜は物騒に瞳を光らせて聞いたです。

「へえ？じやあオマエは白雪より強いのか？」

「ふふん、当然だ。私は東側の『階層支配者』だぞ。この東側の四桁以下にあるコミュニケーションでは並ぶものがない、最強の主権者なのだから」

『最強の主権者』——その言葉に、十六夜・飛鳥・耀の問題児三人は一斉に瞳を輝かせた。

「そう………ふふ。ではつまり、貴女のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニケーションは東側で最強のコミュニケーションという事になるのかしら？」

「無論、そうなるのう」

「そりや景気のいい話だ。探す手間が省けた」

三人は？き出しの闘争心を視線に込めて白夜叉を見る。白夜叉はそれに気づいたように高らかと笑い声をあげた。

「抜け目ない童達だ。依頼しておきながら、私にギフトゲームで挑むと?」  
「え? ちよ、ちよつと御三人様!」

慌てる黒ウサギを右手で制す白夜叉。

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている。ところで、おんし等はよいのか? この童達はやる気のようにじゃが」

「ん? ああ、俺はいいよ」

「私も遠慮しておきます」

「私は白夜叉様の強さは知っていますので」

白夜叉は死鬼達にも自分と競うか聞いたが、三人はそう言って断った。

「あら、怖気づいたのかしら?」

死鬼とセイバーの遠慮の言葉に飛鳥は挑発した。

「いや、怖気づいてはいないさ」

「じゃあ何故断ったのかしら？」

「単に戦うのが面倒だったから。だって白夜叉、お前『白夜叉』だろ？」

死鬼のその質問に、白夜叉は面白そうな瞳をして言った。

「ほう。おんし、私の正体に気付いたか」

「まあね。名前を聞いた時点で大体分かった。それになんかセイバーと同じ感じがしたから」

「ふむ、そうか。そこのお嬢さんと同じというのが気になるが………まあよい。——さておんし等、ゲームの前に一つ確認しておく事がある」

「なんだ？」

白夜叉は着物の裾から“サウンドアイズ”の旗印——向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、壮絶な笑みで一言、

「おんし等が望むのは『挑戦』か——もしくは、『決闘』か？」

刹那、六人の視界に爆発的な変化が起きた。

六人の視界は意味を無くし、様々な情景が脳裏で回転し始める。

脳裏を掠めたのは、黄金色の穂波が揺れる草原。無数の兵士の骸と剣が突き刺さる丘。森林の湖畔。

記憶にない場所が流転を繰り返し、足元から六人を呑みこんでいく。

三人が投げ出されたのは、

白い雪原と凍る湖畔——そして、  
水平に太陽が廻る世界だった。

## 第十二話だそうですよ？

「「……………なっ……………!?!」」

「これは……………」

「へえ……………やっぱり……………」

余りの異常さに、十六夜達は同時に息を呑んだ。

死鬼は余り驚いていなかったが。

箱庭に招待された時とはまるで違うその感覚は、もはや言葉で表現出来る御技ではない。  
い。

遠く薄明の空にある星は只一つ。緩やかに世界を水平に廻る、白い太陽のみ。

まるで星を一つ、世界を一つ創り出したかのような奇跡の顕現。

啞然と立ち竦む問題児組に、今一度、白夜又は問いかける。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は『白き夜の魔王』——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんし等が望むのは、試練への『挑戦』か？それとも対等な『決闘』か？」

魔王・白夜叉。少女の笑みとは思えぬ凄味に、再度息を呑む問題児組。

“星霊”とは、惑星級以上の星に存在する主精霊を指す。妖精や鬼・悪魔などの概念の最上級種であり、同時にギフトを“与える側”の存在でもある。

十六夜は背中に心地いい冷や汗を感じ取りながら、白夜叉を睨んで笑う。

「水平に廻る太陽と……そうか、『白夜』と『夜叉』。あの水平に廻る太陽やこの土地は、オマエを表現してるってことか」

「如何にも。この白夜の湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私をもつゲーム盤の一つだ。まあ、私の正体はその赤い小僧には既に見破られていたがの」

白夜叉が両手を広げると、地平線の彼方の雲海が瞬く間に裂け、薄明の太陽が晒される。

“白夜”の星霊。白夜とは、フィンランドやノルウェーといった特定の経緯に位置する北欧諸国などで見られる、太陽が沈まない現象である。

そして“夜叉”とは、水と大地の神霊を指し示すと同時に、悪神としての側面を持つ鬼神。



数多の修羅神仏が集うこの箱庭で、最強種と名高い「星霊」にして「神霊」。彼女はまさに、箱庭の代表ともいえるほど——強大な「魔王」だった。

「これだけ莫大な土地が、ただのゲーム盤……?!？」

「如何にも。して、おんし等の返答は?」「挑戦」であるならば、手慰み程度に遊んでやる。——だがしかし「決闘」を望むなら話は別。魔王として、命と誇りの限り闘おうではないか」

「……………」

飛鳥と耀、そして自信家の十六夜でさえ即答できずに返事を躊躇った。

白夜叉が如何なるギフトを持つかは定かではない。だが勝ち目が無いことだけは一目瞭然だ。しかし自分達が売った喧嘩を、このような形で取り下げるにはプライドが邪魔した。

しばしの静寂の後——諦めたように笑う十六夜が、ゆつくりと挙手し、

「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」

「ふむ?それは決闘ではなく、試練を受けるといふ事かの?」

「ああ。これだけのゲーム盤を用意出来るんだからな。アンタには資格がある。——  
いいぜ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」

苦笑と共に吐き捨てるような物言いをした十六夜を、白夜又は堪え切れず高らかと笑い飛ばした。プライドの高い十六夜にしては最大限の譲歩なのだろうが、『試されてやる』とは随分と可愛らしい意地の張り方があったものだ、と、白夜又は腹を抱えて哄笑をあげた。

一頻り笑った白夜又は笑いを噛み殺して他の二人にも問う。

「く、くく………して、他の童達も同じか？」

「………ええ。私も、試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

苦虫を噛み潰したような表情で返事をする二人。満足そうに声を上げる白夜又は、一連の流れをヒヤヒヤしながら見ていた黒ウサギは、ホッと胸をなでおろす。

「も、もう！お互いにもう少し相手を選んでください！ “階層支配者”に喧嘩を売る新

人と、新人に売られた喧嘩を買う。『階層支配者』なんて、冗談にしても寒すぎます！それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前の話じゃないですか!!」

「何？じゃあ元・魔王様ってことか？」

「はてさて、どうだったかな？」

ケラケラと悪戯っぽく笑う白夜叉。ガクリと肩を落とす黒ウサギと問題児組。

「それで、私の正体を暴いた赤い小僧と金髪の少女はどうする？ 『挑戦』か？それとも

『決闘』か？」

問題児組の『挑戦』を確認した白夜叉は今まで聴きに徹していた死鬼達主従組にそう聞いた。

「私はシキの判断に従います」

「ふむ。では小僧は？」

「……………白夜叉が選んでいいよ」

「……………ほう？」

少し予想外の言葉に思わず聞き返す白夜叉。

「俺は『挑戦』でも『決闘』でもどっちでもいい。白夜叉がやりたいと思う方で、ゲームをしよう。もし、白夜叉が『決闘』を選んだとしても、俺は文句は言わない。全力で行くさ」

「ふむ。そうきたか……」

あつさりとその言い放った死鬼に、黒ウサギと問題児組はもちろん、白雪まで目を見開き驚いた。

「本気か、ご主人？白夜叉様の規格外はご主人も見ただろう？」

「そ、そうですよ死鬼さん！もし万が一の事があつたら……っ！」

「大丈夫だよ、二人共。セイバーもいるし、心配ないって」

慌てて止めようとする白雪と黒ウサギをそう言って宥める死鬼。それを聞いた白夜叉は面白そうに笑って、

「ハハハハハッ！面白いことを言う小僧だ！うむ、いいだろう。だが、他の童達の〃挑戦〃が先だ。それが終わるまで待つがよい」

白夜叉が死鬼にそう言ったその時、彼方にある山脈から甲高い叫び声が聞こえた。獣とも、野鳥とも思えるその叫び声に逸早く反応したのは、春日部耀だった。

「何、今の鳴き声。初めて聞いた」

「ふむ……………あやつか。おんし等三人を試すには打って付けかもしれない」

湖畔を挟んだ向こう岸にある山脈に、チョイチョイと手招きをする白夜叉。すると体長5mはあるかという巨大な獣が翼を広げて空を滑空し、風の如く三人の元に現れた。

驚の翼と獅子の下半身を持つ獣を見て、春日部耀は驚愕と歓喜の籠もった声を上げた。

「グリフォン……………？、本物!？」





## 第十三話だそうですね？

ギフトゲーム名 // 魔王VS剣の英霊とその主 //

・プレイヤー一覧 四季咲 死鬼

セイバー

・クリア条件 白夜叉を打倒する。

・クリア方法 白夜叉を降参させる。二人がかりでも良い。

・敗北条件 特に無し（ギブアップするまで）

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開始します。

// サウザンドアイズ”印 //

// // // // // // // // // // // //



「…………二人がかりで来い、か…………。随分と余裕だね、白夜叉」

「フツ、まあ。私は強いからの。何人増えても別に構わんぞ?」

「………………言ってくれますね、シロヤシャ。それは慢心です。負けても後悔しないでくださいよ?」

「これは慢心ではなく余裕、というやつだ」

問題児組の試練が終わり、死鬼とセイバー、白夜叉は広大な雪原で向かい合っていた。ゲームの内容はいたってシンプル、ただ相手を打ち倒せばいい。それ以外は基本、何でもアリだ。

そして、「ここに居るのは危ない」という死鬼の提案で、

「ヤハハ、死鬼の奴がどこまでやれるか楽しみだぜ」

「ま、お手並み拝見ね」

「……………楽しみ」

「ご主人は大丈夫だろうか……………」

「だっ、大丈夫です!きつと大丈夫なはずです!」

十六夜達は、一足先にゲーム盤から出て、中で行われるゲームを観戦していた。

「さて、いい加減始めるか、白夜叉」

「ふむ、そうなのう。私も楽しむとするか。先手はそちらで良いぞ?」

「お、いいの?んじやお言葉に甘えて……………いけるか?セイバー」

「ええ、いつでも」

「よし!いくぞ、セイバー!」

「はい!」

「!」

気合の声と共に、セイバーが白夜叉に肉薄し、その剣を振るう。だが白夜叉は即座に攻撃を察知して回避する。

「むう、見えない武器か……。厄介じやのう」

「そちらも中々当たってくれませんか」

(……………これ、俺が参加する必要無くな?)



先程の様にセイバーの振るう剣を回避する白夜叉。だがその直後、死鬼が刃が歪に捻じ曲がった剣を弓に番え、空間ごと削り取って射って来た。

慌てて飛び退く白夜叉。しかし、死鬼がそこに更なる追い打ちを掛ける。

「ラストスパートだセイバー！ 『風王結界』<sup>インビシブル・エア</sup>を解け！ 宝具で決めるぞ！」

「！えええ！一撃で沈めます！」

「ッ!?（何か、とてつもない物が来るッ!!）」

死鬼の指示により、セイバーは『風王結界』<sup>インビシブル・エア</sup>を解除し、その剣を、常勝の剣を顕現させた。

対して死鬼は、死の気配が纏わり付いた真紅の槍を取り出し、投擲した。

「———その心臓、貰い受ける！ 『突き穿つ死翔の槍』<sup>ゲイ・ボルグ</sup>!!」  
「ングッ!?ぬおおおおおおお!!」

死鬼が投擲した『突き穿つ死翔の槍』は凄まじい威力を持って白夜叉に襲い掛かった。

しかし、流石は太陽の星霊である。心臓に貫く筈だった『突き穿つ死翔の槍』を、右肩にまでずらしたのだ。

ただでさえ満身創痕の白夜叉に、セイバーは止めとばかりに常勝の名を告げる。

「とどめだ、決めろセイバー!!」

「星の一撃、受けるがいい! 『約束された勝利の剣』!!」

「ぬっ!?!ぐおおおおおおおおお!!」

立ち昇る光の柱が視界を覆う。やがて光が収まると、そこには、

「……………きゆう」

黒焦げになった白夜叉がいた。

「……………やり過ぎたかな……………」

「……………かもしれませんか……………」